J. Jpn. Bot. **92**(5): 263–264 (2017)

Obituary

岡田 稔：柴田承二先生を悼む

元植物研究雑誌編集員，元株式会社ツムラ常務取締役（中央研究所長）
公益社団法人東京生薬協会

Minoru OKADA: My Memory of the Late Professor Shoji SHIBATA (1915–2016)

Former member of the Editorial Boad of The Journal of Japanese Botany, Former Director of Tsumura Laboratory, Tokyo Crude Drugs Association

植物研究雑誌前編集長，東京大学名誉教授柴田承二先生が平成 28 年 7 月 12 日にご他界されました．享年 100 歳，ご長命でした．柴田先生のご訃報を耳にし，愕然としました．柴田先生には学問だけではなく，あの品の良さからくる仕草など多くを学ばせて頂きました．柴田先生の生薬学講座助教授の藤田路一先生が植物研究雑誌の編集員でしたので本郷の東大薬学部の同講座には良くお邪魔をさせて頂きましたが，当時の柴田教授は遠い存在でお話しをする機会もありませんでした．もともと先生はご自分からお話しをされるようなお方ではなく，傍にいらしてもお話しをすることもありませんでした．後に柴田先生が植物研究雑誌の編集委員になられ，急にお近づきができた感じが致しました．

植物研究雑誌は牧野富太郎先生が創設された雑誌ではありますが，雑誌の発行・維持等を含めた資金援助を株式会社津村順天堂に話が持ちかけられ，東京帝国大学薬学部生薬学講座の朝比奈泰彦先生のご指導の下に津村研究所から発行するに到り，事務局として津村研究所の者が雑務等を請け負い，現在に到っております．事務局では編集員へのご連絡や編集員の選任なども協力をさせて頂いておりましたので，柴田先生の編集員へのお願いの時など事務局の私が駆けずり回りました．藤田路一先生が引退されて以来，当時の編集員には薬学者がおりませんでしたので，薬学関係の原稿を集めるべきではないかとの編集会の意見も出された関係もあり，1986 年に柴田先生に植物研究雑誌の編集員としてご参加いただくべく，植物研究雑誌の経緯，趣旨，内情をご説明しました．柴田先生は朝比奈先生の後継者でありましたが，東京大学を退官され，再就職されて明治薬科大学も退職され，当時四谷三丁目にありましたミノファーゲン製薬に「柴田天然薬物研究室」を作られてご専門の立場の研究をなされておりました．当時の植物研究雑誌は薬学者が投稿しても却下されるものと思い込まれていたため，薬学的論文はほとんどありませんでした．周囲の方々からは，“ 植物研究雑誌は編集メンバーを見ても敷居が高い ”，“ 生薬学などの論文は受け付けてくれない ” などとの評判もありました．また，全体に投稿論文数も少なく，編集員の先生方に急いで論文を書いていただいたこともありました．このような事情もかなりご説明を申し上げた記憶があります．後に，柴田先生は関係する先生方へお声をかけて下さり，少しずつ原稿も集り始めた気がしています．

中でも柴田先生ご自身から原稿を投稿していただいたことはありがたいことでした．柴田先生は「正倉院薬物に関しての追試の実験をやっているのだが，これをまとめたら研究雑誌に投稿してもいいだろうか」とお気にされながらの投稿でした．編集会では，今まで生薬に関して，特に植物化学に関する論文は殆どないので是非にお願いしますと，論文を歓迎してお受けしたものでした．

柴田承二先生は 1948–1949 年の正倉院薬物第一次調査（調査員代表朝比奈泰彦，調査員木村康一，藤田路一他 7 名）に参加され，この結果は昭和 30 (1955) 年に調査報告書として朝比奈泰彦編修『正倉院薬物』（植物文献刊行会）に纏められました．続いて平成 6–7 (1994–1995) 年の第二次調査では柴田先生が代表となり，相見則郎，水野瑞夫他 4 名で主に植物基原生薬を調査されました．この調査結果として次の論文を植物研究雑誌に発表

されました．

柴田承二 1991. 正倉院薬物調査研究補遺「人参」について．植物研究雑誌 **66**(1): 1–6.

柴田承二 1991. 正倉院薬物調査研究補遺「大黄」について．植物研究雑誌 **66**(2): 70–75.

柴田承二 1991. 正倉院薬物調査研究補遺「甘草」について．植物研究雑誌 **66**(3): 127–130.

第1報の「人参」については，「試料の何れもが現代市販栽培人参エキスのサポニンの分離パターンと同様の結果を与え，アメリカ人参，三七人参，竹節人参，ヒマラヤ人参のそれと全く異なるパターンを示した．正倉院収蔵の人参に於てその含有サポニンが長年月の間加水分解等を受けることなく，殆ど原型のまま配糖体の形で保たれていたことは特に注目に値する」と結果をまとめられています．

第2報の「大黄」についての報告では，「第一次調査当時は不明であった大黄の瀉下成分sennoside A及びBを標準品として用い，同定かつ定量を行うことが出来た．比較的不安定なsennoside類が配糖体の形で千数百年の歳月に耐えて正倉院大黄中に存在していることは極めて興味深いと報告されています．この結果において正倉院薬物の「大黄」が現代最高級の大黄として珍重されている錦紋大黄と証明されたことは非常に大きな結果であり，我々生薬を学ぶ者に大きな衝撃として残され，且つ参考になったものである」と報告されています．

第3報の「甘草」については，「追試実験を試みた結果，試料のメタノールエキスを用いたHPLC分析によって主成分glycyrrhizinが極めて高い含有量で存在していることが判明した．他に，フラバノン配糖体liquiritin，カルコン配糖体isoliquiritinの存在を認めた．これらのことは現在の東北，西北甘草が*Glycyrrhiza uralensis*の根に同定された中国産甘草の首位を占めていることを考えると，この種に近似していることは否定できない．正倉院収蔵甘草にglycyrrhizinが1200年余の長年月安定に存在してきたことは一般にサポニンが昆虫の忌避物質であることにもよるが，極めて注目される」と結ばれました．

このような生薬，薬物の化学的研究が植物研究雑誌に登載されることの乏しさがあったものを柴田先生が中心となられ報告されたことは，後世の研究者に対して大きな刺激と励みを与えていただいたことが今でも大きく記憶に残されています．

1986年9月24日に編集長原 寛先生がご他界になられ，急遽，次の編集長を決める必要に迫られ，編集会で先生方からのご意見聴取した結果，皆様の見解を総合して柴田先生に編集長をお願いすることにまとめさせて頂いたと思います．当時の編集会のメンバーは植物分類の各分野の最高の先生方で固められており，この中での柴田先生は薬学であること，しかも植物化学のご専門であられましたので，それまでの編集会では特別に強いご発言はされていませんでした．編集会でお集まりの先生方から「編集長に柴田先生は如何ですか」とのご推薦には戸惑いを見せられ，「勘弁して下さい．私はその任ではありません」とのお返事が返ってきました．その場は保留とさせて頂き，後日柴田先生の研究室にお邪魔してお願いいたしました．今思い出しますと，柴田先生へのご説明には，投稿論文の不足，特に薬学・生薬学範囲の論文の不足を強く申し上げました．ようやくご承諾のご返事を頂戴できました．

柴田承二先生の植物研究雑誌の編集長ご推薦については，当時の社長・津村重舎氏からも賛成の言葉を受けました．会社としても生薬関係の報告が投稿されることを歓迎しておりましたので，柴田先生の研究雑誌へのご発表は大きな賛同を受けました．津村社長は原編集長のとき以来，時々編集会の先生方をお招きしての会食の会を開き，各先生方特に原先生や話題豊富な津山 尚先生・木村陽二郎先生との歓談を楽しみにしておられました．柴田先生が新編集長となられた時の会合では柴田先生と漢方や生薬の分野での会話が弾んでおられたように記憶しています．

柴田先生は毎月第一土曜日の夕方5時から開催する編集会には必ず元気なお姿でご出席され，2–3時間の編集会をお纏め下さいました．余談ですが編集会開催日の午前中にはテニスを楽しまれてから出席しているとも楽しそうにお話されていたことも忘れがたい思い出です．